



カラチ市内の絨毯工房にて
「PJCの目標は、単に事業を行なうのではなく、社会的に弱者である様々な人々をこの事業に巻き込むことです」
(11ページ PJC代表カユーム氏との対話から)

目的

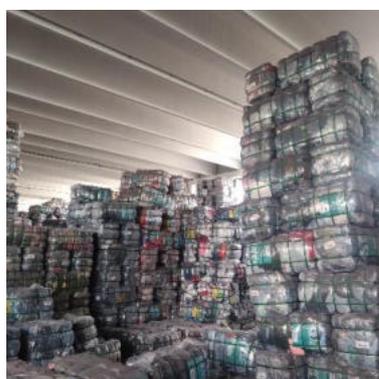
パキスタン&ジャパンカンパニー(PJC)との連帯事業の推進

これまでAKBG(アル・カイル事業グループ)が担ってきた、JFSAから送られた古着をパキスタンで販売する事業を、PJCが引き継いでから3年が経過しました。その間で順調に業績を伸ばしています。

AKBGとPJCの大きな違いは、専任スタッフがいることと、拠点として倉庫を構えたことにあります。実体を得たことで信用を得、市場内の競争に参加して、適正価格での販売ができるようになり、それだけで売上を大きく伸ばす事になりました。また、独自に得た資金で仕入れと販売ができるようになり、以前のように日本から古着のコンテナが到着した時にだけ活動するのではなく、日常的に活動することによっても利益を得られるようになりました。現在は代表のアブドル・カユーム氏を中心に9名のスタッフが働いています。

古着輸入

PJCが仕入れている物の中で、JFSAが一番多く輸入している物は古着です。それらは主にKEPZ(カラチ特別輸出加工区)、通称ゾーンと言われる地域から仕入れています。この場所では多くの古着業者が世界中から古着を輸入し、それらを仕分け、また世界中に輸出しています。そんな工場の中の数軒にPJCからスタッフを派遣し、JFSAへ販売する古着を仕入れています。



ゾーンにて世界中から集まった古着が仕分けされ、行先別に積み上げられている。1ペールは100ポンド(約45kg)

日本からの要望を、仕入れ現場で直接伝える事務局田邊(左から2番目)



仕入れのためには日本での販売に適したファッションやヴィンテージに関する理解が必要です。それを担当するヴィッキー氏とロマーリオ氏は、PJCで働く前には、他の日本の古着屋に向けた買い付けの仕事に長年携わっていました。そのため、知識や経験が豊富です。彼らが中心となり、6人のスタッフが作業しています。今現在の流行や需要については、JFSAの担当スタッフとSNSで連絡を取りながら共有しています。彼らからは写真とボイスメッセージが送られてきます。日本では短くても文章でやり取りすることに慣れているこちら側としては、最初戸惑いました。しかし彼らは教育を受けていないため、読み書きがうまく出来ないのです。パキスタンで古着にかかわる仕事をしている多くの人が同様です。会社のオーナーや管理者は教育を受けている為に英語が話せる人が多いことと比べると、格差を感じます。

彼らが仕事に携わっていたという表現にしたのは、彼らにとってそれは雇用や契約など安定したものはなかったためです。仕入れた量や質に対する相手側の独断的な出来高払いであったり、流行の変化や

仕入れ先の変更など相手の都合で急に呼ばれなくな

ったりと、継続して仕事を得られない状況でした。

ヴィッキー氏は長年携わる付き合いの中で、カユ

ーム氏と知り合っていた縁でPJCに加わりました。

今までの様な、緊張感が高く先行きが不安な状況で

はなく、安定して働いていけることを望んでいる、

そしてそのために今後もPJCで働きたいと言っ

ています。そう思う彼らとともに毎日仕事ができるこ

とは、PJCを立ち上げた大きな成果だと思ってい

ます。



左から、PJC 代表カユーム氏、
仕入れ担当ヴィッキー氏、同じ
くロマーリオ氏、事務局田邊

PJCの仕入れ担当メンバー



民芸品輸入

JFSAはPJCから主にパキスタンやアフガニ

スタンの民芸品の輸入も行なっています。それらは

彼らの生活に根ざす文化や習慣に基づいた品々です。

PJCが倉庫を構えるエリアには、民芸品を取り扱

う卸業者もたくさんいます。現地で生産されたもの

やそれらの中古品だけでなく、それに類する輸入品

も合わせて取り扱っています。カユーム氏がそのよ

うな品々を集めるために周囲の卸業者を訪ね、仕入

れています。

同時に、現在生産している現場にも足を運んでい

ます。絨毯の工房や紡績、製糸工場などです。その

多くはいわゆる家内工業で、規模も大きくありませ

ん。仕事と生活が密接な彼らとのやり取りは、JF

SAが目指す連帯事業と合っているように感じます。

牧場で羊などを飼育し、毛を刈って
糸を紡ぎ、工房で製作し、店舗で販
売する
こちらのお店はそれを全て自分たち
で行なっているそう



PJCとの関わりが密になるに連れて、日本側の

販売成績が彼らの収益に直結していることを強く意

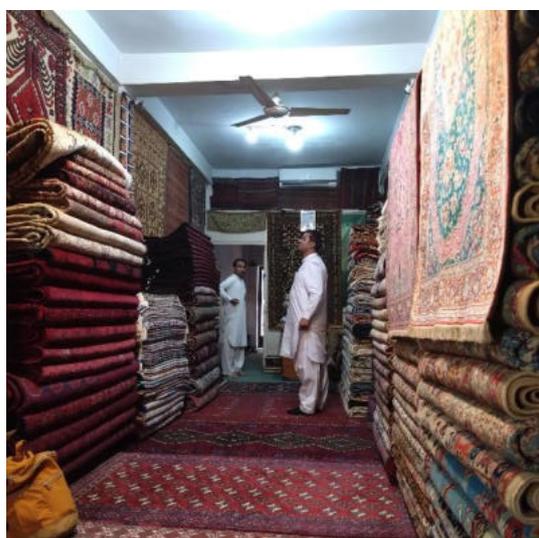
識するようになりました。そのことがそのまま支援

金の大きさに繋がるからです。JFSAの活動が始

まって30年になりますが、新たに緊張感をもって取

り組める事業が始まっていると感じています。

注文が入り、納品
絨毯の価格は大きさによるため、
こちらはかなり高額の商品



店主曰く「絨毯は金と同じで価値が落ちない
手仕事の価値は時間が経つと上がる」
アンティーク絨毯の卸問屋にて

目的 PJCとの連帯事業の推進 変わったこと、変わらないこと

今回の派遣では、担当している国内事業（千葉店チャルカバザール）をPJCとともに進めていくため、9月に派遣された田邊航太郎事務局（報告P2～3）に続き、輸入古着の仕分けの確認や、中古・新品マーケットの視察、カラチ市内の絨毯工房や民芸品マーケットの見学などを行いました。

コロナ禍以降、6年ぶりに訪れたカラチの街には、新しいショッピングセンターや高層ビルが建ち、新しい電車も走るなど、以前とは違う風景もありました。一方で、ローカルな街並みや人々の暮らしぶり、これまでと変わらない「いつものカラチ」でもありました。

街中では、今回も多くの働く子どもたちの姿を目にしました。信号待ちの車に果物や飲み物を売りに来る子ども、屋台の店番をする子ども、バイク修理をする少年（フォトギャラリー参照）、バザールで荷物を運ぶ子どもたち。

バザールで働く子どもたちは、客が購入した重たい食料や衣類、雑貨などを、大きな肩掛けバッグに入れて運びます。そのバッグは、藁のような丈夫な植物で編まれ、肩が痛くならないよう布で補強した

り、壊れば修理したりしながら使い続けられている様子でした。JFSAにも実物があり、活動説明会でも度々紹介しています。

今回、少し驚いたのは、2002年に私が初めてパキスタンを訪れた頃から変わらず使われていたそのバッグが、日曜バザールでは、大手家具ショップの青いビニールバッグに変わっていたことです。軽くて丈夫で、私たち自身も倉庫での仕分けや古着の梱包によく使っているものです。時代の流れを、思いがけないところで感じました。



バザールで働く子どもたち



日曜バザールの様子
様々なものが売られている

また今回の派遣では、PJCスタッフや事業に関わる方々、そのご家族と直接交流する機会にも恵まれました。PJC代表のカユームさんは交友関係が

とても広く、年代や職業を問わず「友人です」と紹介してくださいます。そして皆決まって「家はすぐそこだから、食事をしていきなさい」と声をかけてくれます。すべてのお誘いには応えられませんが、「ではチャイだけでも」と、今回も多くのチャイやジュースをいただきました。元アル・カイルアカデミースタッフのシャミームさん、PJCスタッフのアサドさん、会社経営者としてカユームさんと繋がりのあるノミさん、皆さんのお宅やオフィスを訪問し、最終日にはカユームさん宅でPJCスタッフとともに夕食を囲みました。

「友人が連れて来る人は、皆友人、そして家族のような存在」そんなパキスタンの人々の温かさは、今も変わらず、訪れるたびに心がやすらぐ大切な風景です。



カユームさん宅での夕食会



屋食をこちそうになった元学校スタッフのシャミームさんご家族と魚のフライが美味しかった左から事務局古田、大橋

目的 PJCとの連帯事業の推進

今回は商品の仕入れをメインに、パキスタンに1週間程行かせていただきました。また、PJCとの新規事業として、リメイク品のオーダーをしました。

今回、k a p r e のお客さんから「アメリカ製のバンダナを何枚か使用して、シャツを作って欲しい」という依頼をいただきました。日本で注文を受け、その縫製をパキスタンで行なってもらえるようにしてはどうかと考えました。お客さんの理想の形にできるように、事前に日本でやり取りを重ね、基になるシャツのサンプル品をパキスタンに持っていき、バンダナシャツの試作品を作ってもらいました。パキスタンでは、ナシーム氏とシュジャ氏という縫製職人の方に依頼しました。オーダーはMとLの2種類のサイズでしたので、それぞれを作ってもらったのですが、依頼した内容と違う箇所がいくつかありました。すぐに修正してもらうように頼みたかったのですが、私はウルドゥ語が話せません。加えて1ミリ単位での修正が必要だったので、一つ一つ丁寧に伝える必要がありました。英語でPJCメンバーのカユーム氏とアサド氏に翻訳してもらいながら、

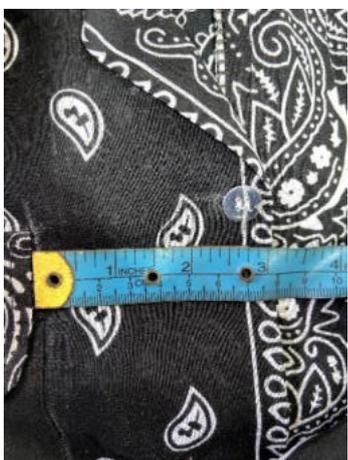
内容を細かく伝えて作り直してもらいました。1回では上手く伝えることが出来ず、何度も確認をしながら、試作品を完成させることが難しかったです。



リメイクバンダナシャツのオーダー確認中

このように、お客さんと職人さんの間に入り仕事をすることが初めてだったので、緊張と不安がありました。しかし帰国後、日本のお客さんに完成したバンダナシャツの試作品をお見せした際にはとても喜んでいただけだったので、私自身もとても嬉しくなりました。また、パキスタンの縫製職人の仕事ぶりを活かすことが出来て良かった、とホッとしました。バンダナシャツのデザイン性が良く、ナシーム氏の感性がそのままデザインに反映されていることがとても良かったと思います。

J F S A のメンバーとして働き始めて4年目になるので、責任を持ってPJCメンバーと一緒に協力し、この事業を大きくしていきたいと思えます。



試作品を1ミリ単位で調整



リメイクバンダナシャツMサイズ



リメイクバンダナシャツLサイズ

町の工房でバンダナをリメイクした試作品のシャツの注文をする

フォト ギャラリー

مرمت کرنا

マルマット カルナー
修理する



カラチ市 古着を修理、リメイクする



カラチ市 道端にあるバイクの修理の店
2人の少年が作中



洪水被災地ダドゥの農村
壊れた家のレンガを集めて
建て直しに使う

コロナ禍が明けた2023年5月から再開したkapre Bazaar(カプレバザール)は、今回で6回目の開催となりました。

Bazaarの内容は、店舗kapreでのセール、POPUP MARKET(古着、雑貨、飲食等の出店ブース)、kapreオリジナルリメイク商品の販売です。POPUP MARKETには、いろいろなお客さんに出店していただいています。

今回は、この企画がkapreの一大イベントとして認知されているなど感じる回でした。ピーク時はJAいちかわさんから借りている臨時駐車場14台分と店前駐車場14台でも収まりきらないほどのお客さんが来店してくれました。POPUP MARKETに並ぶ商品を楽しんでくれる方や、kapreオリジナルリメイク商品を楽しみにしてくれている方など、様々な理由でBazaarに会場してもらっています。今いるスタッフ全員の個性が輝いていて、それぞれのカラーが生かされていることも、お客さんうちを選んでもらえている理由かなと思います。

特に毎回違う企画で作っているリメイクアイテム

ムを、お客さんが楽しみにしてくれていることがとても良いと思っています。縫製チームが一つ一つ丁寧に心を込めて仕上げた一着や、世界に一つしかない魅力的な商品が手に入れます。

今回はレザー、テントカバー、キルト、バンドナ、タペストリーなどを、バッグやジャケットにリメイクして販売しました。毎回スタッフも欲しくなってしまう程のかわいいアイテムばかりです。そのままでは商品として出すことが厳しいダメージのあるものを再構築して新しいものに創りかえることで、SDGsとしても理にかなっています。

今回、これまでで一番多い来場者数(購入者数)になったのもkapreの暖かいアットホームな空間と、スタッフの日々の努力の積み重ねによるものだと思います。洗濯から陳列まで、できる限りお客さんに良いものが提供できるように準備と、丁寧な接客を心掛けて日々営業しています。そして一番大事なことは、スタッフも楽しく仕事をすることだと思います。リメイクアイテムの企画もそうですが、楽しんでいることが自然と形になり、伝わっています。仕事の中に遊びがある、そんな環境にできるようなお店作りをしています。

kapreオリジナルリメイクバッグ



スタッフ着用kapreオリジナルリメイクジャケット



「軒先市」

協働事業担当事務局

中崎 亜矢子

「春菊のおすすめ料理、お鍋以外で何かある？」

「旬のやわらかい葉っぱはそのままサラダも良いですよ。塩で揉んでごま油、ほぐしたささみとおろしニンニクも少し、和えると最高ですよ」

「えー生で食べられるのね」

すると左手のお客さんからは

「春菊、俺は今夜白和えにするよ」

一月の澄み渡った青空の下、そんな会話を交わしたのは、毎月第二土曜日に古着屋チャルカバザールの軒先で開催される『軒先市』の会場です。10時半の開始を待ちきれない様子の常連さん達が、続々とご来場されます。お目当ては、地元の旬の野菜たち。採れたてが並び、定期的な詰め放題企画も人気で、野菜の販売ブースはあつという間に賑わいます。

これらの野菜は、生活クラブ風の村が運営する障がい者就労継続支援B型事業所「農仲舎八街」の畑から。そして薬物やアルコールの依存症を克服し、社会の一員として人生を再スタートさせる為、共同生活を送る「千葉ダルク」の、九十九里の畑からも。軒先市の日には生産者の皆さんが直接販売もしてくれるので、作り手と買い手が対面でやり取り出来る貴重な場でもあります。

このような交流は、全てのブースで楽しめる、軒先市の魅力の一つです。キッチンカーで熱々を提供する本格スパイスカレーの「カレー食堂まほろ

ば」は、毎回100食近くの調理に絶えず手を動かしながらも、お客さん一人一人との会話を大切にしている様子が窺えます。リサイクル雑貨の「あうん」

は、東京都荒川区で、元野宿者・失業者が始めた仕事おこしの取り組みから、使い捨てではない労働、生きがいと誇りある働き方の実践の一つとしてリサイクルショップを運営。毎月構成をアレンジした一期一会の品物たちと、見る人それぞれとの出会いを運んでくれます。食品や雑貨に限らず、夏にはメヘンディ（ヘナで手や顔に模様を描く。パキスタン等の文化）が楽しめたり、リサイクル浴衣市も開催されたりと、この紙面ではご紹介しきれない沢山の出店者さん達が、工夫を重ねながら、お客さんの質問に答えたり、商品の魅力を伝えています。

軒先市の開催日は、古着屋チャルカバザールでは毎月恒例のセールのタイミングでもあります。お店と軒先市、どちらも楽しんでもらえるよう、引き続きスタッフでアイデアを出し合いながら、面白い場であるよう続けていきたいです。

☆軒先市の開催のお知らせや、日々の野菜の入荷などはこちらでお伝えしています↓



軒先市
instagram

1 / 10 (土) 軒先市
MONTHLY POP UP MARKET!

ばしょ・チャルカバザール軒先
せかん・10:30から14:30ころ

産直とれたて野菜
純品カレー
手作りお弁当
自家焙煎コーヒー
も糸詰めの放題
自然素材のお香
多肉植物

出張和衣マルシェ @軒先市

1点ものリサイクル雑貨
包丁研ぎ組-outc.
今日はリサイクル着物市
和衣マルシェもやって来る!
どなたでもふり袖
遊ばせてください

2026年最初の軒先市をインスタグラムで告知
リサイクル着物市も同時開催されました



沢山の野菜も、お屋にはほぼなくなることも
野菜お目当てのかたは早めの来場がおすすめ



第 23 回 JFSA 定期総会 ご報告

2025 年 11 月 20 日(木) 千葉市文化センター9 階会議室にて
出席者: 100 名(本人出席 24 名/委任状 51 名/書面議決書 25 名)
提案はすべて承認されました。ご協力ありがとうございました。

総会終了後、PJC やアル・カイルアカデミーとオンラインで交流会を行ないました。次ページをご覧ください。

2024 年度は、衣類等のリユース事業としては J F S A が計画した回収量 130 トンをほぼ達成することができました。皆様、ご協力ありがとうございました。結果としてパキスタンへ 4 回、タイへ 2 回、合計 6 回コンテナを輸出することができました。

一方 P&J カンパニー(P J C)からは海外古着を輸入し、カプレ(柏店)、チャルカバザール(千葉店)で販売することで団体の活動を支えました。言い換えれば、P J C にとっては J F S A からの輸入販売と J F S A への海外古着の輸出版売、これら 2 つが事業の柱であり、その事業収益からアル・カイルアカデミーへ寄付を行なっています。(中略)

パキスタンのアル・カイルアカデミーは 1987 年に数名の子どもたちとムザヒル校長で始められ、現在では約 6500 名の生徒が学んでいます。そして今年は新たにプログラミングやアプリ開発、グラフィックデザイン等を学べるアル・カイル工科専門学校 (Al-Khair Institute of Technology/略称 AIT) が開校され、現在約 700 名が通っています。この専門学校は、4 年生大学



定期総会 会場にて
午後の交流会の様子

への進学が困難な生徒でも、アル・カイルカレッジを卒業後(またはカレッジに通いながら)6~12 ヶ月で IT 分野の仕事に必要な技術を習得できることを目的に設立されました。

運営母体のアル・カイル福祉協会は、教育活動以外にも手狭になっているアル・カイル医療センターを移転する工事を行なっており、来年には開院予定です。アル・カイル福祉協会はこのような様々な活動を、アメリカなど海外の基金や、様々な支援を受けて行なっています。

J F S A は 1995 年 10 月に設立されてから、おかげさまで今年 10 月に 30 周年を迎えました。私自身は 1998 年千葉センター開設時から J F S A に関わっているのですが、回収や選別作業、販売など、様々な風景が思い出されます。それらは過去の出来事であると同時に、迎ってきた道のりにはこれからの J F S A の活動を照らす指針となる事も含まれていると感じています。

新年度も、各地の交流企画や回収企画へ参加する計画です。皆様に直接お会いできるのを楽しみにしております。直接お会いする事が叶わない方は、ぜひ引き続き J F S A の会報や SNS 等で活動の様子をご覧くださいますと幸いです。

30 年の節目に、J F S A は様々な人々との関わりを更に深め、活動の基盤となる連帯事業を推進したいと考えています。皆様、引き続き宜しく願いいたします。

2025 年 11 月

J F S A 理事長 依知川 守

(総会議案書・はじめに より一部抜粋)

2025 年度(2025 年 10 月~2026 年 9 月)の会員を募集しています

【2024 年度 正会員 個人:157 名・団体 10 支援メンバー 個人:1060 名・団体 5】

NPO 法人 JFSA の会員は次の 2 種類です

1. 会員(正会員):この法人の目的に賛同して入会した個人または団体
2. 支援メンバー:この法人の目的に賛同し、賛助の意思を持つ個人または団体

☆活動の趣旨に賛同される方のご参加をお待ちしております

●年会費(10 月~翌年 9 月)

個人:会員 5,000 円 / 支援メンバー 2,000 円

団体:会員 50,000 円 / 支援メンバー 10,000 円

※活動への寄付にも右記の口座をご利用できます

(通信欄に「寄付」とお書き添え下さい)

会員・支援メンバーの方には、会報(年 3 回)、回収のお知らせ(年 3 回)、サポーターグッズ(年 1 回)をお送りします。正会員の方には総会議案書(年 1 回)もお届けします。

会費振込み口座(※お振込みの手数料はご負担ください)

●他行からのお振込み

ゆうちょ銀行 金融機関コード:9900

預金種目:当座

店名:〇一九店(ゼロイチキュー店)

口座番号:0444198

※お振込み後 1 週間以内に、振込み日、住所、お名前、種類、口数、お振込み金額をメール(右上 QR)またはお電話でお知らせください

●郵便振替 口座名:JFSA 番号:00160-7-444198

※お名前、ご住所の書き忘れにご注意ください

お名前、ご住所等のご連絡、記載がないときは
無記名のカンパとして受領しますのでご注意ください



定期総会後 交流会

総会にご参加いただいた皆さんと、パキスタンで暮らすJFSAと連帯する仲間たちがオンラインでの交流の時間を持ちました。

- ・ P & Jカンパニー(PJC)スタッフからのビデオレター
 - ・ P J C代表カユーム氏との対話
- ・ アル・カイルアカデミー代表サード氏との対話
- ・ アル・カイルアカデミー第8分校卒業生へのインタビュー

JFSAの事業パートナー、PJCのスタッフの皆さんからのビデオレターをご紹介しました。彼らは現地輸入業者の大きな倉庫で、ベルトコンベアー上に流れてくる膨大な量のアメリカ古着から、日本でJFSAが古着ショップで販売するための古着をチョイスする仕事をしています。口を揃えて「これからもメンバーと協力して、この事業を成長させたい!」と話してくれました。

ライブ参加した代表のカユームさんからは「PJCの目標は、単に事業を行なうのではなく、社会的に弱者である様々な人々をこの事業に巻き込むことです。私たちはスタッフと協力して、皆が調和や平等、そして友情のもとで働けるようにしたい。これからも事業を通じて、教育や仕事の機会を提供できるよう努めます。」と挨拶がありました。

(PJCとの連帯事業については2～5ページも是非ご覧ください)

続いて現地アル・カイルアカデミー第8分校(女子校)卒業生で、母校で先生として働く9名全員が参加してくれました(先生は合計19名)。お名前などをご紹介する程度で時間切れになってしまったのですが、彼女達の表情と声に直接触れることができ良かったです。

*その後12月にパキスタンを訪問した際には、その中の1人、アリーシャさんのお宅を訪問することができました。父親はテレビなどを修理する仕事をしているそうで、妻(母親)は2人おりそれぞれ子どもたちも含め、同居していました。

アリーシャさん(17歳)はナースリーから4年生までは第3分校で、その後5～10年生は第8分校に通ったそうです。現在は公立のカレッジ(1年生)に通っていて、2025年5月から第8分校のコンピュータークラス(2-8年生対象)で補助教員として働いています。「私自身が生徒の頃も、週2日のコンピューターの授業が楽しかったです。コンピューターという分野自体に関心があり、今は教える事が楽しいです。」と話していました。また自身が生徒の時にはテコンドーの授業を受け、何か問題があった時に自分でも対応できると自信がついたそうです。



アリーシャさん(左端)のお宅にて、生活クラブ虹の街理事長福住さん(左から3番目)、アジアン代表森田さん(中央)、事務局依知川(後方)



卒業後は先生として働いているアリーシャさん(左から2番目)と女子校に通う生徒たち



マーシャルアーツ(武芸)と呼ばれる授業ではテコンドーやアーチェリーを習う



第93回コンテナ送り出し&到着報告 パキスタン

2024年度の計画通り年6回のコンテナ送り出しを行なうことができました！

2025年9月25日 積み込み実施 重量：23,719KG 横浜港出港：10月3日
2025年12月4日 パキスタン・カラチ 古着卸業者ニアーズ氏倉庫到着
ボランティア参加：千葉ダルク、あうん、オイシックス・ラ・大地
パルシステム千葉組合員、個人の方など約30名

パキスタンで需要の高い毛布・布団類 5,536KG、シーツ 900KG、タオル 750KG を特に多く積みこみました。

コンテナの荷物はP&Jカンパニー(PJC)から卸業者ニアーズ氏に1KGあたり180ルピーで卸売りされ、売上は4,269,420ルピー(2,390,875円)となりました。売上から古着代金、海上運賃、関税等の経費を差し引き、1,411,768ルピー(79万円程)がPJCの利益となります。

ニアーズ氏の主な販路はアフガニスタン向けですが、2025年10月にパキスタンとアフガニスタンの国境地帯で発生した軍事衝突のため、現在、国境が閉鎖されています。ニアーズ氏の事業もその影響を被り、従来通りには販売が出来ないため、倉庫で在庫となっているそうです。

*1パキスタンルピー=0.56円 1/11 現在



第93回コンテナ積み込み後の集合写真



ニアーズ氏の倉庫に到着したコンテナ

第94回コンテナ送り出し&到着報告 タイ

2025年11月13日 積み込み実施 重量：16,821KG 横浜港出港：11月20日
2025年12月11日 タイ・バンコク 古着卸業者WASアリ・シャー氏倉庫到着
ボランティア参加：千葉ダルク、あうん、オイシックス・ラ・大地、個人の方など約30名

タイで需要の高いバッグ 2,823KG、ぬいぐるみ 772KG、アクセサリー116KG、男半・長袖類 2,500KG、ワンピース 2,361KG を積みこみました。

これまでバンコクの港に着いたコンテナはタイとカンボジアの国境の街アランヤプラテートにある、アリ・シャー氏(古着卸業者 WAS 代表)の倉庫に移動し、PJC カユーム氏とともに卸売りをしてきました。2025年6月に両国の国境紛争により国境が閉鎖され、カンボジア側との物流に大きな影響が出ました。依然として情勢は不安定なため、今回のコンテナはバンコクにあるWASの倉庫に荷物を下ろし、販売をすすめることとなりました。アランヤプラテートでは販売を重ねることで安定した卸売り先ができてきましたが、今回は新たにバンコクで新規の顧客を開拓する必要があります。2026年1月にカユーム氏、JFSA事務局もバンコクに入り、アリ・シャー氏とともに販売にあたる予定です。



第94回コンテナ積み込み後の集合写真



バンコクのWAS倉庫に保管してあるバッグ(オレンジ袋)のようす



Hanako食堂さんの麻婆豆腐



***** ごぼればなし *****

第94回送り出しは、タイの年末年始休暇と重なるため、急遽予定を早めることになりました。昼食は通常パキスタンカレーを調理して皆でいただきますが、今回、準備が難しくなったため、軒先市に出店しているHanako食堂さん(千葉市内にある街のお弁当屋さん)に依頼し、メニューは麻婆豆腐、もつ煮込み、唐揚げでした！無事に積み込み終わった後の昼食は、参加者にとってお楽しみタイムのようで、Hanako食堂さんのメニューも大好評でした！

